ホームページ版

令和元年度

南アルプス市ふくし相談支援センター

コミュニティソーシャルワーカー（CSW）

活　動　報　告　書

「一人ひとりの相談に親身に寄り添い

共生できる社会の実現を目指して」

社会福祉法人　南アルプス市社会福祉協議会

ふくし相談支援センター

はじめに

社会情勢の変化や少子・超高齢化社会に伴い、地域、家庭環境、就労形態等生活スタイルが様変わりしてきており、我が市も核家族の増加や隣近所など人と人のつながりの希薄化、高齢者世帯・独居高齢者世帯の増加が目立つようになりました。その中で、生きづらさを抱え生活している人も増えています。また、困りごとを相談できずに悩んでいる人に気づけず、気づいたときには重篤な状況になっていることもあります。そのため、孤独や孤立者が増え、更には老老介護、生活困窮、虐待、ごみ屋敷、引きこもり状態など家庭を取り巻く問題や課題も複雑多様化しています。

南アルプス市においては、第３次地域福祉計画の重点施策の一つとして、平成２８年度から社会福祉協議会がコミュニティソーシャルワーカー（ＣＳＷ）配置事業の委託を受け、今年度で４年目を迎え、５名が担当地区で活動しています。市内には様々な相談窓口がありますが、住民の方に一番近い相談場所として、気軽に相談できる体制を目指しています。生きづらさを抱える一人ひとりに寄り添うきめ細かな相談支援を心掛け、生活状況や生活歴を確認しながら就労支援や他機関へのつなぎ支援、経済的トラブルやごみ屋敷問題、徘徊等に対する支援など、相談者の悩み、困りごとに寄り添い、一人ひとりの方に重点を置き活動しています。

令和元年度においては、まだ相談に繋がっていない困りごとを抱えた人の発見のため、様々な会議時や、各地区民生・児童委員や協議体、サロンや企業等にも積極的に周知・啓発面を行いました。また、そういった地域の人が集まる場所に呼んでいただき、出張ふくし勉強会も開催することができ、地域の現状、気づきの視点、発信することの大切さを学び知り、住民自身が他人ごとから自分ごとへ、小さなことも見逃さないという意識、身近なふくしに関心を持つきっかけ作りにも取り組みました。生きづらさを抱える方、その方々を支えるための地域づくりを行っています。まだまだ小さな一歩ですが、私たちは「共に支えあう社会」を目指して、地域住民と一緒に地域で支え合う解決の仕組みづくりを目指しています。

この活動報告書は、４年目（令和元年度）を迎えたＣＳＷの実践内容をまとめたものです。ＣＳＷの活動を多くの方に知っていただき、ご理解いただけることを望むとともに、これからの活動においてご協力をいただければ幸いです。

令和２年４月

目 次

① ＣＳＷ担当地区と地区担当者概要

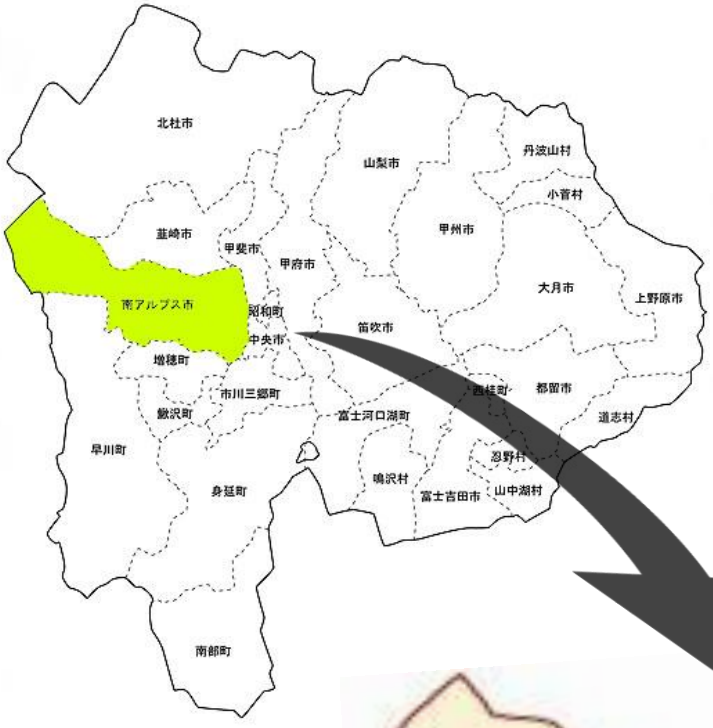
② ＣＳＷの役割

③ 令和元年度事業報告
　１）　アウトリーチの強化
　２）　個別ケアの強化
　３）　個別課題から地域の問題への転換
　４）　地域活動支援
　５）　人材育成
　６）　協議体の積極的活用

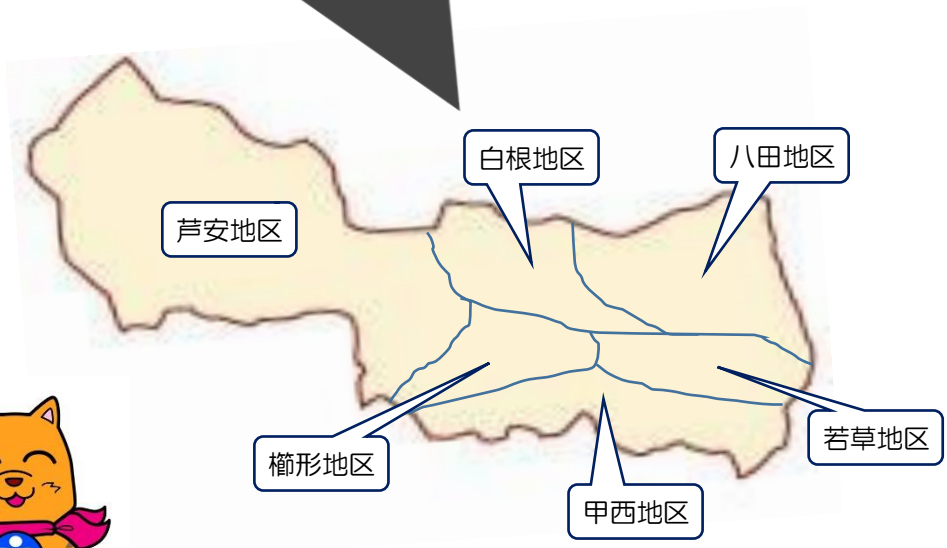
④ 活動の振り返りと今後に向けて

⑤ 活動事例　～個別支援を重点に、地域づくり実践～
　・事例①　支援者と地域の方をつなぎ、協働へ
　・事例②　地域から孤立の声の出せない障害者
　・事例③　認知症を隠す家族と見つめる地域住民
　・事例④　本人に寄り添った住民による支え合い
　・事例⑤　がんばって貢献してきた地域が助けてくれた

①ＣＳＷ担当地区と地区担当者概要



旧町村単位を１名のCSWが担当し、地域の方からの相談にのり、住みやすいまちづくりを進めています。（八田、芦安地区は２地区を１名が担当）



担当地区	性別	資格	経験年数 （相談支援にかかわる業務）
八田・芦安	女	社会福祉主事	１１年
白根	男	社会福祉士	９年
若草	男	社会福祉主事 介護福祉士	１１年
櫛形	男	社会福祉士 精神保健福祉士	１０年
甲西	男	社会福祉士 介護支援専門員	８年

②ＣＳＷの役割

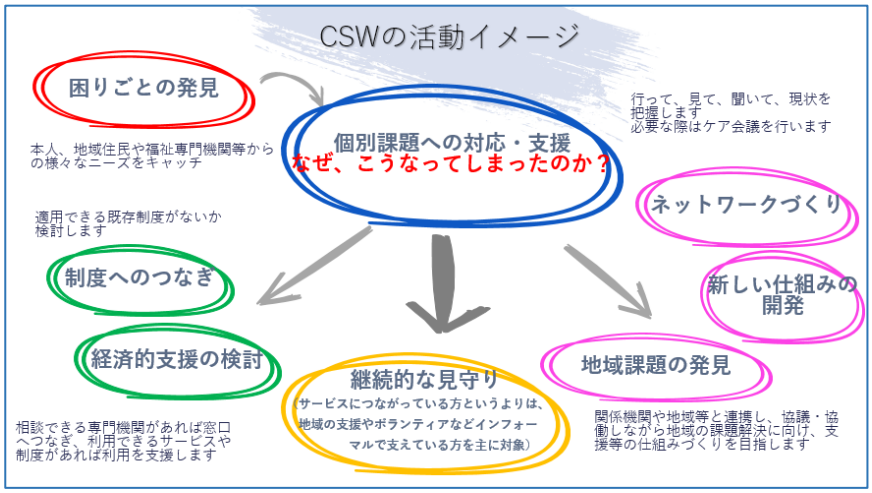
高齢者、障害者、ひとり親家庭、ひきこもりの方など社会的援護が必要な方（要援護者）や制度の狭間、地域の狭間で SOS のキャッチが容易にできない方や貧しさを持つ人々とその家族が、住み慣れた地域で安心して暮らすことができるよう、個別の相談に対応し、更には『共に支えあう社会』の実現に向け、地域住民と一緒に解決の仕組みをつくる活動を行っています。

主な活動

生きづらさを抱えている一人ひとりに寄り添い、生活課題に対して相談支援を行うと共に個人を支える地域をつくる援助を行います。

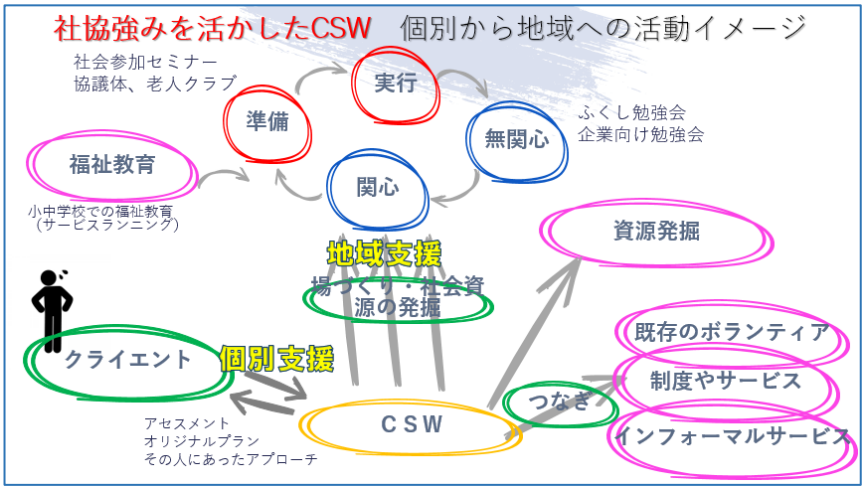
1. **高齢者、障害者、ひとり親家庭など援護を要する方の地域での生活を支えるネットワークの構築**
2. **要援護者に対する見守り、相談、適切なサービスへのつなぎと支援**
3. **地域住民の福祉活動の手助け**
4. **行政との連携**
5. **社会資源の改善・開発**

年齢や内容を問わず、相談を受け付けています。活用できる制度やサービス、資源を探りながら、解決の糸口を共に考えます。



【個別支援】

【地域への展開】



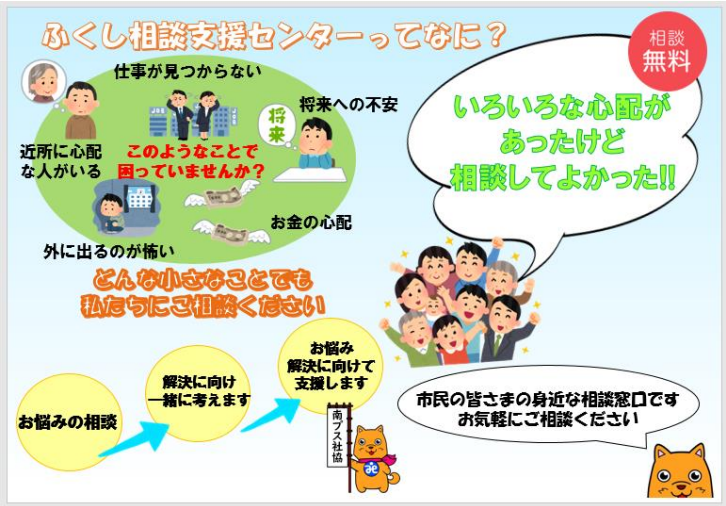
③令和元年度事業報告

１）アウトリーチの強化 ～地域を歩き、相談支援を必要としている方のところへ～

相談支援を必要としている方を知るためにＣＳＷの存在を住民の方に知ってもらうため、facebook の活用や公共施設、商店、企業などにチラシを置き CSW 役割を説明してきました。積極的に地域の方々が集まる場（サロン、各地区の地域支えあい協議体等）へ出向くことを心がけ、身近な相談窓口だと知ってもらうきっかけを作ったことで、地域住民からは「こんなことも相談して良かったんだ!!」と気軽に相談していただけるようにもなりました。また、毎月２回、より身近な場所で相談できるように、各地区の公共施設や公民館に出向き、出張ふくし相談会を行なっています。しかし、「近所の人に知られたくない。」という思いがや、相談会という堅苦しいイメージもあり、来てくれる方が少ないことが課題としてあります。

今年度は、若い世代へも相談してもらえるよう、小中学校にもＣＳＷ紹介のチラシも配布しました。その結果、保護者の目にとまり相談につながることもあり、更なるＰＲの必要性を認識することもできました。

ＣＳＷは、自らの足で地域を歩き、相談支援を必要としている方のところへ出向いていくことと同時に、ＳＯＳが発信できない人の把握を行うためにも、地域の方々と顔見知りとなり、気軽に相談ができるような関係性を築いていくことを今後も目指していきます。



◎年間新規相談者数

	八田	白根	芦安	若草	櫛形	甲西	市外	総合計
本人	2	6	0	13	8	10	3	42
同居家族	1	3	0	0	0	0	0	4
別居親族	1	3	0	1	2	1	0	8
地域住民・知人	3	6	0	2	1	3	0	15
店・企業	0	1	0	1	1	0	0	3
民生児童委員	4	2	0	8	3	5	0	22
医療機関	0	2	0	0	1	0	0	3
警察・保健所	0	0	0	0	0	0	0	0
地域包括支援センター（直営）	0	0	0	1	4	2	0	7
地域包括支援センター（北部）	0	0	0	1	0	0	0	1
介護福祉課	0	0	0	0	0	0	0	0
ケアマネジャー	0	4	0	0	0	1	0	5
自立相談支援機関	0	1	0	1	2	1	0	5
生活保護	0	0	0	0	0	2	0	2
家庭児童相談室	0	0	0	0	0	0	0	0
健康増進課	0	1	0	0	0	0	0	1
障害者相談支援センター	0	2	0	0	0	0	0	2
障害者計画相談	0	0	0	0	0	0	0	0
社会福祉協議会	0	3	1	0	5	3	0	12
市役所各部署	0	0	0	0	0	1	0	1
その他	0	1	0	0	1	0	0	2
合　計	11	35	1	28	28	29	3	135

２）個別ケアの強化～一人ひとりの相談支援の強化～

深刻な問題を抱える方の相談に対応するために多様な知識や技術が必要とされています。研修や勉強会等に積極的に参加し、ＣＳＷ自身のスキルアップを図ると共に関係機関との連携を密に取り、相談内容に合わせた支援が行えるように取り組んできました。さらに、地域ささえあいの協議体にも参加したことで、ＣＳＷと住民の方とで地域の問題を一緒に解決していくという共通認識も図れたことは大きな成果となりました。

一人ひとりの支援にあたり、ＣＳＷ自身が多問題、複雑化した相談を一人で悩み抱え込まないために、定期的に支援内容の確認などを５名のＣＳＷ同士や市の自立相談支援機関と共に行いました。様々な視点から多くの意見を聞き、情報を整理することで、計画的で効果的な支援に結びつけられました。

相談内容により、様々な機関への働きかけが必要となります。近年は、就労に関する相談も増えています。引きこもりの方や、なかなか就労や社会に繋がらない方などへ、社会参加の場、成功体験を積める場、交流ができる場、就労へのキッカケの場としてステップワン事業やゲーム大会を開催してきました。今年度は参加者自身が立案から計画し実施するといった過程も経験し、参加者自身の自主性・主体性を引き出せ、就労に向けての第一歩となりました。そして、就労への協力を頂けた新たな企業との連携もできました。今後も協力可能な様々な企業への働きかけを行い、連携を深める中で就労の場を広げるための取り組みをしていきます。

社会適応訓練

◉社会適応訓練の登録事業者の方と対象の方をつなぎ就労体験実施。

ステップワン事業(料理教室)

◉日程決め→メニュー考案→買い出し→調理→販売
といった一連の業務の流れを体験。

◎連携をとった関係機関（延べ件数）

	八田	白根	芦安	若草	櫛形	甲西	市外	総合計
本人	650	659	95	527	745	633	18	3327
同居家族	68	39	4	29	49	11	0	200
別居親族	7	95	0	28	43	54	0	227
地域住民・知人	30	183	0	13	97	51	0	374
店・企業	19	47	4	6	8	19	0	103
民生児童委員	71	50	0	46	34	76	0	277
医療機関	21	49	0	17	27	23	0	137
警察・保健所	0	18	0	7	18	0	0	43
地域包括支援センター（直営）	1	6	0	27	61	53	0	148
地域包括支援センター（北部）	54	54	13	2	0	1	0	124
介護福祉課	10	6	0	4	0	3	0	23
ケアマネジャー	2	43	0	29	32	9	3	118
自立相談支援機関	86	30	7	8	59	17	2	209
生活保護	19	45	0	7	20	50	1	142
家庭児童相談室	5	4	0	1	66	7	0	83
健康増進課	3	41	1	6	10	10	0	71
障害者相談支援センター	38	44	0	10	8	4	0	104
障害者計画相談	13	34	0	13	12	18	0	90
社会福祉協議会	59	68	17	122	78	183	5	532
市役所各部署	22	15	15	4	13	12	0	81
その他	38	25	5	8	113	38	0	227
合　計	1216	1555	161	914	1493	1272	29	6640

３）一人ひとりの問題から地域の問題への転換

一人ひとりの聞き取りを深める中でいくつかの地域の問題の分析を進め解決に向けて取り組みました。

住民主体の地域支えあい協議体と連携し、ＣＳＷが抱えている一人ひとりの問題を地域支えあい協議体へ発信し検討することで活動へと繋がるケースが出てきました。ゴミ屋敷の片づけ、庭木の生い茂りの片付け、子ども食堂などの活動を通し、住民の方と地域の問題を考える機会にもなりました。しかし、その活動も継続的な活動ではなかったこともあり、活動を通じての振り返りや困りごとを抱えた人を気に掛けていくことができる継続的な地域づくりが必要という課題も見えてきました。

今後は、住民の方への理解、協力を得る中で継続的な関りができ、一人ひとりが生きがいを持って暮らしやすい地域を目指して、地域の問題を考え、解決に向けて柔軟に対応し進めていきます。

子ども食堂
◉CSW から協議体への発信が
一つのきっかけとなり実現

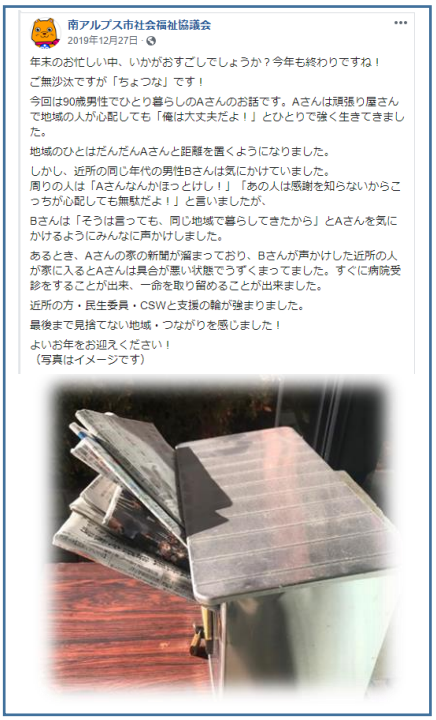
４）地域活動支援

相談者の困りごとには、「介護サービスでは対応できない」「障害者手帳や障害年金の対象とはならない」「不登校やひきこもりで家にいる」など制度、サービスでは解決できないことが多くあります。また、問題を抱えた人の多くは「社会とつながっていない」「コミュニケーションが苦手」などの課題があります。

地域の中には、隣近所の声かけで深刻な状況にならずに済んだケースや些細な困りごとを住民同士で助け合っているケースなど「ほっとした話」がたくさんあります。隣近所のつながりが薄くなっているこんな時代だからこそ、日ごろの何気ないおつきあいの大切さを広報誌やホームページ、Facebook などで発信をしています。

Facebook

投稿記事より



南アルプス市社会福祉協議会
2019年12月27日

年末のお忙しい中、いかがおすごしでしょうか？今年も終わりですね！

ご無沙汰ですが「ちょつな」です！

今回は90歳男性でひとり暮らしのAさんのお話です。Aさんは頑張り屋さんで地域の人が心配しても「俺は大丈夫だよ！」とひとりで強く生きてきました。

地域のひとはだんだんAさんと距離を置くようになりました。

しかし、近所の同じ年代の男性Bさんは気にかけていました。
周りの人は「Aさんなんかほっとけし！」「あの人は感謝を知らないからこっちが心配しても無駄だよ！」と言いましたが、

Bさんは「そうは言っても、同じ地域で暮らしてきたから」とAさんを気にかけるようにみんなに声かけしました。

あるとき、Aさんの家の新聞が溜まっており、Bさんが声かけした近所の人が家に入るとAさんは具合が悪い状態でうずくまってました。すぐに病院受診をすることが出来、一命を取り留めることが出来ました。

近所の方・民生委員・CSWと支援の輪が強まりました。

最後まで見捨てない地域・つながりを感じました！

よいお年をお迎えください！
（写真はイメージです）

南アルプス市社会福祉協議会
2月27日

ふくし相談支援センター　『ちょつな』

年を重ねると地域の集まりに行けなくなるお年寄りがいます。

私が訪れた集まりでもそうした方が増えていると話題に上がりました。

その話題はそれだけでは終わりませんでした。

来れなくなってしまった方の家に行ってお話をしている方がいたのです。

その方にどうして行くのか尋ねると
「人と会えんで寂しいじゃんね。だから私が会いに行ってやるさ。家族は迷惑そうだけど本人が喜んでくれるから行くさ。」とおっしゃっていました。

デイサービスへ行く、ヘルパーさんが家に来ていると聞くと、地域の人は「安心した」「一人ではないね」と安心し気に掛けてもらえない方が多くいます。しかし、その人は地域で暮らし続けています。介護が必要になり支援を受けていても、慣れ親しんだ近所の人の声かけや訪問もその人にとっては大きな支えになり、生きる活力となると感じました。

※写真はイメージです

５）人材育成

【出張ふくし勉強会】

困りごとに対しての早めの気づきや早期の対応へ結びつけ、未然の予防ができる仕組みをつくるため、自治会や地域支えあい協議体、サロンなど、また住民の暮らしの中に直接的に関わっている企業に向けて、ＣＳＷが出張して開催する勉強会を新たな取り組みとして開始しました。

市民向け出張ふくし勉強会では、民生委員・児童委員協議会やサロンなど、地域の人が集まる場所で開催しました。今までふくし勉強会に参加したことがなかった住民も多く、身近なふくしに関心を持つきっかけを作ることができました。

曲輪田令和会　様

日本郵便㈱　様

南アルプスライオンズクラブ　様

企業向け出張ふくし勉強会では、３か所の企業や団体から依頼を受け開催することができました。その結果、企業の窓口業務の方の気づきによりＣＳＷへと連絡があり、早期相談につながりました。普段から地域住民と関わりの深い企業への働きかけが重要であることが改めてわかりました。まだまだ企業からの依頼は少ないですが、今後も地域や関係機関のネットワークを利用して、様々な企業に「出張ふくし勉強会」を社内研修として取り入れていただけるよう周知していきたいと考えています。

出張！ふくし勉強会！

～あなたの地域にお届けします～

企業さんからの依頼も大歓迎

社協では、市内で実際に起きているふくしの問題を「他人事ではなくいつかは自分にも起こり得ること。」として、4年前から市民の方と共に考えるふくし勉強会を開催してきました。
これまでに地域の活動の場（サロンや老人クラブなど）や自治会、企業などでふくし勉強会を行い、延べ1,000名以上の方の参加がありました。
今年度は依頼をいただいた地域へ伺い「ふくし勉強会」を開催します。南アルプス市の現状を知り、自分たちに何ができるかを考えていくきっかけに「出張！ふくし勉強会！」をご活用ください。

4年間のふくし勉強会のテーマを基に勉強会を開催致します。
過去のテーマはこちら（詳しくは裏面を）

ゴミ屋敷　児童虐待　孤独死
ひきこもり　猫と貧困　外出困難　精神疾患

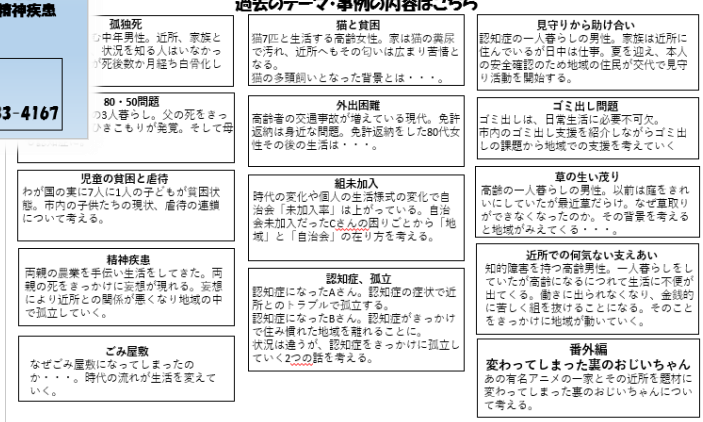
・自治会・サロン等は地域のつながりをさらに深めるために！
・企業は社会貢献の一つとして社内研修でご活用出来ます！
少人数でも伺います。もちろん 無料 です。お気軽にお問い合わせください。

※開催させて頂いた企業・団体は、
社協HP・FacebookなどでPRさせて頂きます。

社協Facebook　社協HP

申込み・問合せ
ふくし相談支援センター
☎284-7830 FAX 283-4167

周知用チラシ



出張！ふくし勉強会！

4年間のふくし勉強会のテーマを基に勉強会を開催致します。
過去のテーマ・事例の内容はこちら

孤独死
○中年男性。近所、家族と状況を知る人はいなかっが死後数か月経ち白骨化し

猫と貧困
猫7匹と生活する高齢女性。家は猫の糞尿で汚れ、近所へもその匂いは広まり苦情となる。
猫の多頭飼いとなった背景とは・・・。

見守りから助け合い
認知症の一人暮らしの男性。家族は近所に住んでいるが日中は仕事。夏を迎え、本人の安全確認のため地域の住民が交代で見守り活動を開始する。

80・50問題
○3人暮らし。父の死をきっ
○きこもりが発覚。そして母

外出困難
高齢者の交通事故が増えている現代。免許返納は身近な問題。免許返納をした80代女性その後の生活は・・・。

ゴミ出し問題
ゴミ出しは、日常生活に必要不可欠。
市内のゴミ出し支援を紹介しながらゴミ出しの課題から地域での支援を考えていく

児童の貧困と虐待
わが国の実に7人に1人の子どもが貧困状態。市内の子供たちの現状、虐待の連鎖について考える。

組未加入
時代の変化や個人の生活様式の変化で自治会「未加入率」は上がっている。自治会未加入だったCさんの困りごとから「地域」と「自治会」の在り方を考える。

草の生い茂り
高齢の一人暮らしの男性。以前は庭をきれいにしていたが最近草だらけ。なぜ草取りができなくなったのか。その背景を考えると地域がみえてくる・・・。

精神疾患
両親の農業を手伝い生活をしてきた。両親の死をきっかけに妄想が現れる。妄想により近所との関係が悪くなり地域の中で孤立していく。

認知症、孤立
認知症になったAさん。認知症の症状で近所とのトラブルで孤立する。
認知症になったBさん。認知症がきっかけで住み慣れた地域を離れることに。
状況は違うが、認知症をきっかけに孤立していく2つの話を考える。

近所での何気ない支えあい
知的障害を持つ高齢男性。一人暮らしをしていたが高齢になるにつれて生活に不便が出てくる。働きに出られなくなり、金銭的に苦しく組を抜けることになる。そのことをきっかけに地域が動いていく。

ごみ屋敷
なぜごみ屋敷になってしまったのか・・・。時代の流れが生活を変えていく。

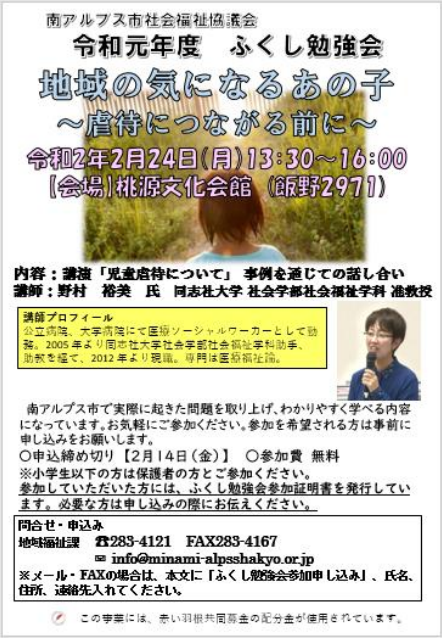
番外編
変わってしまった墓のおじいちゃん
あの有名アニメの一家とその近所を題材に変わってしまった墓のおじいちゃんについて考える。

【ふくし勉強会】

令和２年２月24日（月）に市全体で『地域の気になるあの子』をテーマに、小学生から90歳までの133名の方々が集まりました。約半数は、新民生委員や主任児童委員で、小学生から高校生までの 10 名の参加もあり、皆さん地域福祉にとても興味・関心があることが伺えました。

前半は講師より、現在の社会が抱えている児童福祉の現状を聞き、それを支援していく「児童を見守る地域」の必要性の説明を受けました。そして後半は、事例をもとにグループごと話し合いを行い、若い世代ならではの意見も聞けたことは非常に貴重でとても良い参考になり、気づきの裾野は、広がってきていると実感しました。

今後は、参加者の「ちょっと気になるな、心配だな」というような気づきから、地域のふくしに関わる行動へ移行するそれぞれの段階に合わせた内容で行うことも必要であると感じました。併せて、参加者の活動の場の創出も検討していきたいと考えています。



同志社大学 社会学部社会福祉学科 准教授
「野村裕美先生」を講師にお招きし「令和元年度ふくし勉強会」を開催しました。

【学生に向けたふくし教育】

今年度、社協地域福祉課で行った学生への福祉教育は 13 校で実施されました。その中でＣＳＷも福祉の視点を学ぶ内容で３校に携わりました。ＣＳＷが知る実際に市内で起きている地域の問題をわかりやすく伝えることで、ふくしについて考え話し合える機会となりふくしの心を育むことができました。若年層に伝えていくことは、将来のふくしの充実にもつながります。今後もＣＳＷの視点でのふくし教育を他の学校にも提案し、学生にもできるふくしを自分たちで考えられるよう、「ふくしの心を育むこと」を目的に実施していく予定です。

６）協議体の積極的活用

平成２９年度より小学校区単位で、地域の課題を地域で考え、解決に向けた話し合いの場である地域支えあい協議体の設置が本格的に広がり始めました。平成 30 年度には小学校区全地区で地域支えあい協議体が立ち上がり、地域の中で話し合い、住民同士の支えあいを考え、発信できる場として住民の方が積極的に意見を交わすようになりました。

制度やサービスが利用できない方々は年々増え、その方の家族やそれを取り巻く環境にも課題があります。そうした課題をＣＳＷは知り、地域に投げかけていくことは必須になってきています。

令和元年度はそうした CSW の支援から見えてきた一人ひとりの課題を地域支えあい協議体の場へと投げかけたことで、地域での活動が実施できた地域も出てきました。

今後においても地域の情報収集をし、困りごとを抱える方々の支援や予防策を、各地区地域支えあい協議体と連携しながら進めていきたいと考えています。

櫛形西地区の様子

白根地区の様子

地域支えあいディスカッション 2019 の様子

市内在住の協議体参加者及び協議体に興味のある方が集まり、お互いの日ごろの活動や思いを共有し、今後の活動に活かしてもらうために意見交換会が開催され、ＣＳＷも参加し意見交換を行いました。

④活動の振り返りと今後に向けて

CSW 配置事業の委託を受け、４年が経過しました。一人ひとり支援に重点を置き、内部研修や他機関等が実施する外部研修会などにも積極的に参加し、相談援助技術や各種制度についても学びスキルアップを図ってきました。伴走型支援として、相談者一人ひとりに寄り添い丁寧なアセスメントを心掛け、これまでの生活歴や抱えている困りごとの背景にも着目しながら、なぜそうなったのか根本的な問題を探り、解決に向けた支援を行ってきました。

また、引きこもりの方や、なかなか就労や社会に繋がらない方などへの支援として、社会参加の場、成功体験を積める場、交流ができる場、就労へのキッカケの場としてステップワン事業やゲーム大会を開催してきました。今年度は実施日に参加してもらうだけではなく、参加者自身が立案から計画し実施するといった一連の過程を経験することで、参加者自身の自主性・主体性を引き出すことにも重点を置いて実施しました。

周知・啓発面では、特に相談に繋がっていない困りごとを抱えた人の発見のために、当センターのチラシを様々な会議時や、各地区民生委員・主任児童委員や協議体、サロンや企業等にも積極的に配布し、また若年層へのアプローチの手段として、各学校を通じ全児童保護者へのチラシ配布も行いました。その結果、民生委員・主任児童委員や企業等の窓口職員、住民の方や児童保護者からの相談も徐々にではあるが増え、より身近な相談窓口として浸透してきました。

そしてふくし教育では、一人ひとりの課題や問題を早期発見すべく、小地域で活動されている方々などに向け出張ふくし勉強会を周知することで、開催する団体や企業も増えてきました。地域の現状、気づきの視点、発信することの大切さを学び知ることで、住民自身が他人ごとから自分ごとへ、小さなことも見逃さないという意識も少しずつ根付き始めました。これが続くように広報誌やホームページ、Facebook での発信も行っています。併せて、出張ふくし相談会も毎月開催していますが、相談にくる方は少なく、相談会という場に出向くことへの敷居の高さが伺え、誰もが気軽に相談しやすいような工夫を考えていく必要があります。

令和２年度においては、各支援者との連携、住民の方や地域支えあい協議体・企業との連携を強化し、普段から顔の見える関係性を構築する中で、一人ひとりの支援から地域の関り、『人と人とのつながり』を作り、住民自らが主体となり『つながりから助け合える関係』の構築も目指していきたいと考えています。また、深刻な問題を抱える方の生きづらさの背景が明確にならず、課題解決に向けた取り組みが長期化するケースも少なくありません。そのため、私たちは早期発見のためのアウトリーチを心がけ問題が深刻になることを未然に防ぎ、いつまでも安心して暮らしていくための土台や環境づくり、地域にある様々な人とのつながりなどを活用した地域づくりもより一層進めていきたいと考えています。

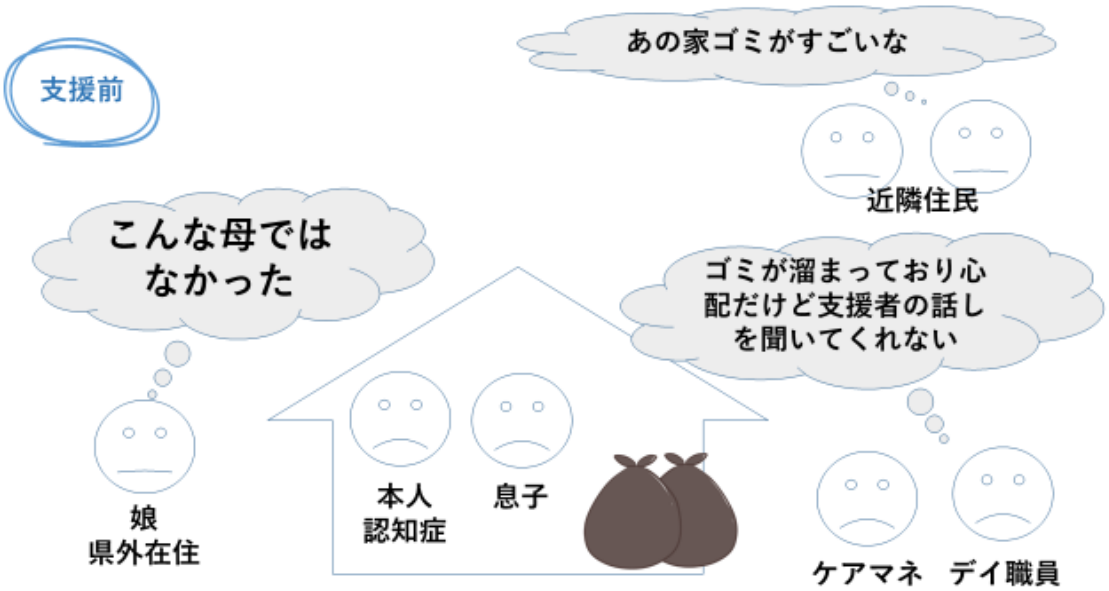
⑤活動事例　～個別支援を重点に、地域づくり実践～

- 事例①　支援者と地域の方をつなぎ、協働へ
- 事例②　地域から孤立の声の出せない障害者
- 事例③　認知症を隠す家族と見つめる地域住民
- 事例④　本人に寄り添った住民による支え合い
- 事例⑤　がんばって貢献してきた地域が助けてくれた

事例①　支援者と地域の方をつなぎ、協働へ

①事例概要（どんな方か・家族・生育暦・困りごとなど）

本人は 90 代女性。長男との２人暮らし。県外に長女。本人は認知症により２年前に免許返納し、家での生活が多くなっている。現在は週２日デイサービスに通っている。歩行に少し不安があるものの身体面では問題ない。
近隣住民の方より「家の中がゴミがあふれている。」と相談がある。ケアマネジャーからも本人、長男に家の片づけを提案していたが「自分たちでやるから大丈夫」と言われてしまい、話は進んでいなかった。近隣住民の方も本人宅の状況を心配していた。



②CSW の働きかけ

～地域に向けての働きかけ～

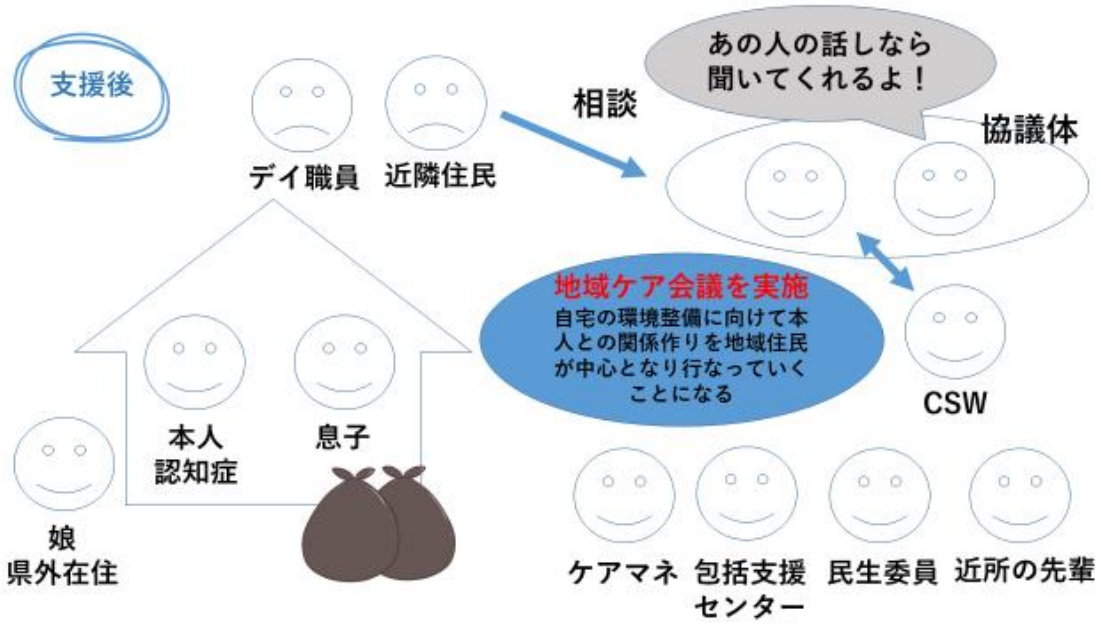
地域支えあい協議体でも本人家族のことが話題に上がる。近隣住民の方でも何ができるか検討。近所に本人の友人がいることがわかり、その友人と支援者をつなぐための会議を実施することになる。

～専門職に向けての働きかけ～

近隣住民の方より心配の声が上がっていることをケアマネジャーに伝え、家の片づけに対して本人、長男の意向を確認してもらった上で会議の日程調整をお願いした。

③CSW 介入の成果

今まで近隣住民の方と支援者が関わることができなかったが会議を通じて関りができた。会議の中では、家の片づけに対しては話しが進まなかったが、本人の生活を改善しようと近隣住民の方、支援者の協働が始まった。



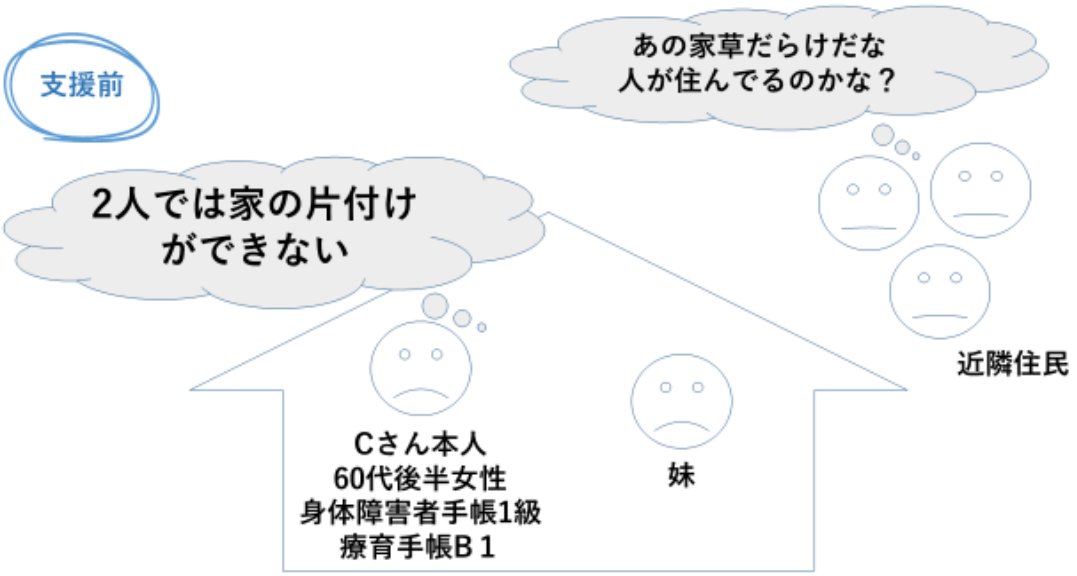
④課題

近隣住民の方へ本人の認知症を理解した上で継続的な支援が得られることが必要。家の片付けがゴールではなく、この家の片づけをきっかけに本人、長男が近隣住民の方から気にしてもらえる存在になっていけるように支援を行っていく。

事例②　地域から孤立の声の出せない障害者

①事例概要（どんな方か・家族・生育暦・困りごとなど）

60 代後半の女性 A さんと妹との 2 人暮らし。A さんは身体障害者手帳と療育手帳を所持。庭木は家に陽の光が入らないほどジャングル化している。一軒家で多くの部屋があるにも関わらずリビングだけでの生活を送っている。そのリビングには足の踏み場もないほど衣類などが山積みとなり、他の部屋は 20 年ほど前から掃除していないため埃まみれの状態。しかし、このような現状でも 2 人は困りごとして感じておらず、CSW が働きかけしても自発的な片付けには至らなかった。



②CSW の働きかけ

～地域に向けての働きかけ～

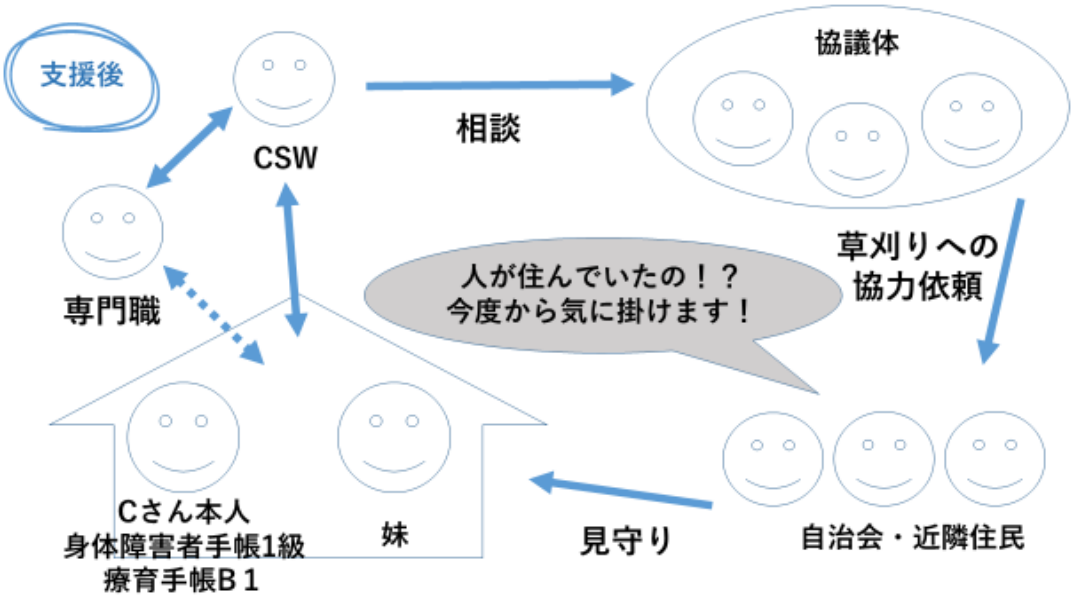
障害を持つ女性が自力でこの状況を変えることはできないため、本人の了承を得て地域支えあい協議体へ協力を募るとそのメンバーから A さんの住む自治会や近隣住民へ呼びかけしてもらうことができる。住民の方々からは A さん宅が通りに面しているものの、庭木の生い茂りがあって空き家だと思っていた人もいたほど地域と関わりが薄かったのが現状であった。

～専門職に向けての働きかけ～

庭木の伐採については、社協のボランティア担当へつなぎ地域住民以外にも協力を依頼。また、今後の介護サービス利用の可能性も踏まえ地域包括支援センターに状況を把握のための情報共有と訪問を依頼。

③CSW 介入の成果

今回の庭木の伐採をきっかけに A さん姉妹の存在を知り地域住民も気にかけてくれ、今後見守りをしていただけるようになった。A さん自身も家に光が入るようになり、次第に気持ちの変化も見え始めてきた。



④課題

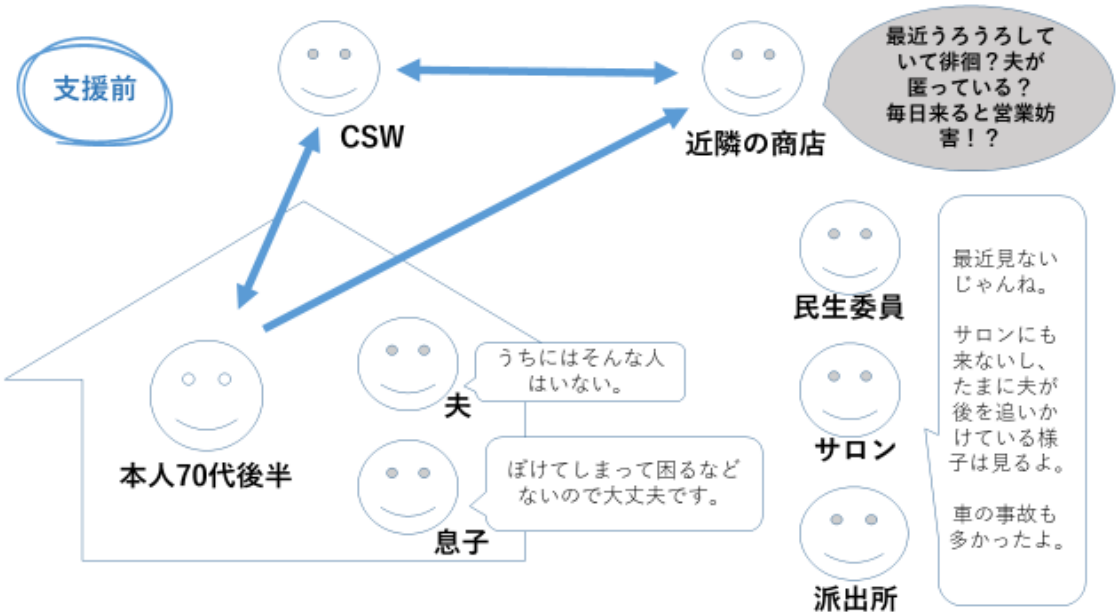
地域住民の関わるきっかけにはなったが、A さん姉妹が困り感を感じる力、発信力が低いので継続して住民の方々に見守りをしてもらいたい。また、各支援者が関わる事で安心して生活が送れるよう制度の利用を促していく。

事例③　認知症を隠す家族と見つめる地域住民

①事例概要（どんな方か・家族・生育暦・困りごとなど）

ふくし勉強会参加経験のある個人商店の店主から「70 代後半の女性 A さんが最近頻回に店に来て、多いときは一日に１０回以上あいさつにくる。その A さんを追うように夫が来て本人に「戻るぞ！」と言い強引に連れて帰ってしまう。」と認知症による徘徊なのか心配で社協に相談となる。

CSW が初回訪問すると玄関先に本人が出てきて、「あら毎日会っている〇〇さんね。わかるわよ～」と初対面の CSW に対して発言がある。その後夫が来て本人を家の中に連れて行ってしまう。別で息子へ連絡すると「年相応にぼけてきているが誰かに迷惑をかけているほどでもないし、困ってはいないので大丈夫です。」と母の状況を理解していないのか、関わらなくて結構という意味の言葉であった。



②CSW の働きかけ

～地域に向けての働きかけ～

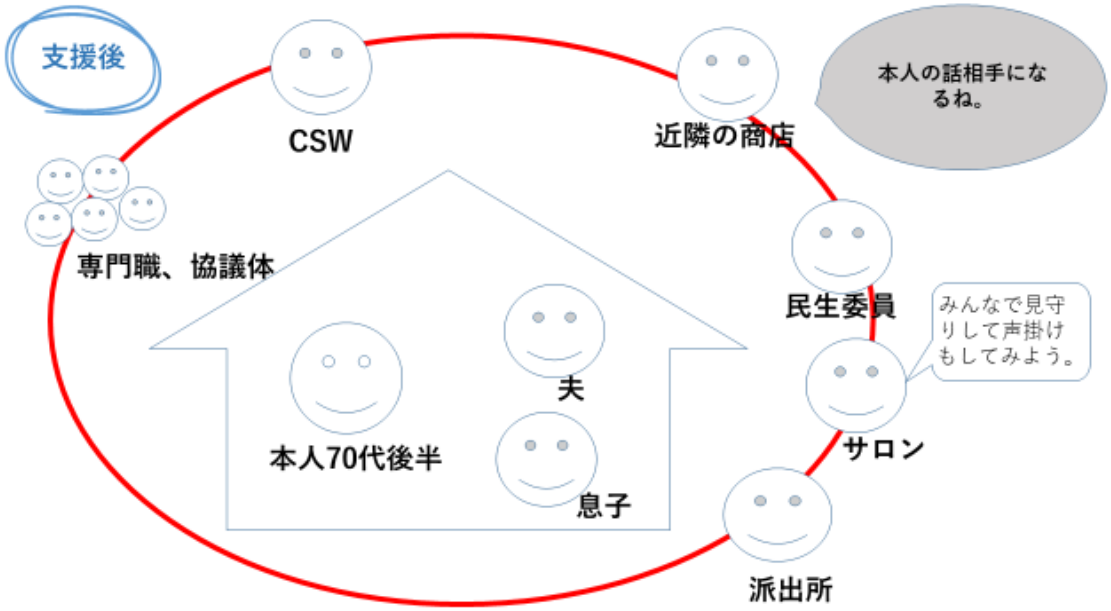
サロンボランティア、民生委員に聞くと「最近は滅多に見なくなった。時折夫が後を追っている姿をみる。」と何気に心配していた。また、駐在所の警察官も姿が見ないことと交通事故を多発し免許返納していることで心配をしていた。それぞれが認知症気味ということは認知していたが、会う機会がないため声掛けなどできず、地域の住民としてできる手段がなかった現状がわかる。

～専門職に向けての働きかけ～

「本人の望む生活と家族の介護負担軽減」を少しでも実現できるよう地域包括支援センター、認知症初期集中支援チームと連携・共有し専門機関として関わってもらえるよう依頼。

③CSW 介入の成果

民生委員、サロンボランティア、派出所、商店それぞれが心配していたことを共有する中で今後 A さんに対して見守り・声掛けをしていただけるようになる。サロンボランティアさんからは「近所の方が家族にとって SOS を言える身近な関係になれればよい」と話す。
専門機関は定期的に訪問することができるようになり、「本人の望む生活と家族の介護負担軽減」の実現にむけて取り組むこととなる。



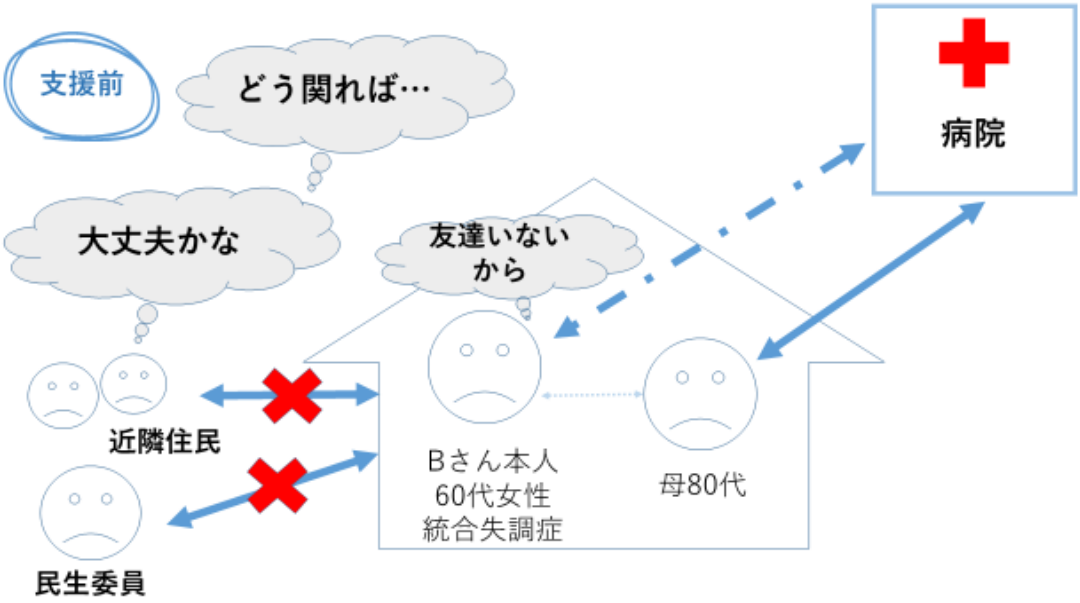
④課題

この地域の地域支えあい協議体は立ち上げられたばかり、今後 A さんのことも踏まえ認知症の理解と家族支援について考える必要がある。

事例④　本人に寄り添った住民による支え合い

①事例概要（どんな方か・家族・生育暦・困りごとなど）

Ｂさん 60 代女性。実家で母親（80 代）と二人暮らし。10 年前、職場の人間関係が原因で辞職し統合失調症を発症。その後家にひきこもりとなり、地域の方もほとんどみかけたことがない。病院受診は不定期で治療は行っていない。現在は無職で障害年金を受け生活しているが金銭的な余裕はない。母親が認知症からの妄想により近所とトラブルになり、次女の存在がわかり CSW につながった。組に加入しているが地域とのつながりはなく、地域からはどう関わっていいかわからないという声がある。自宅はゴミ屋敷で家も老朽化し風呂も壊れており何年も入っていないため清潔面にも課題がある。母親からは本人の情緒不安定さを心配する声があがっていたが、なかなか本人と会うことが出来なかった。



②CSW の働きかけ

～地域に向けての働きかけ～

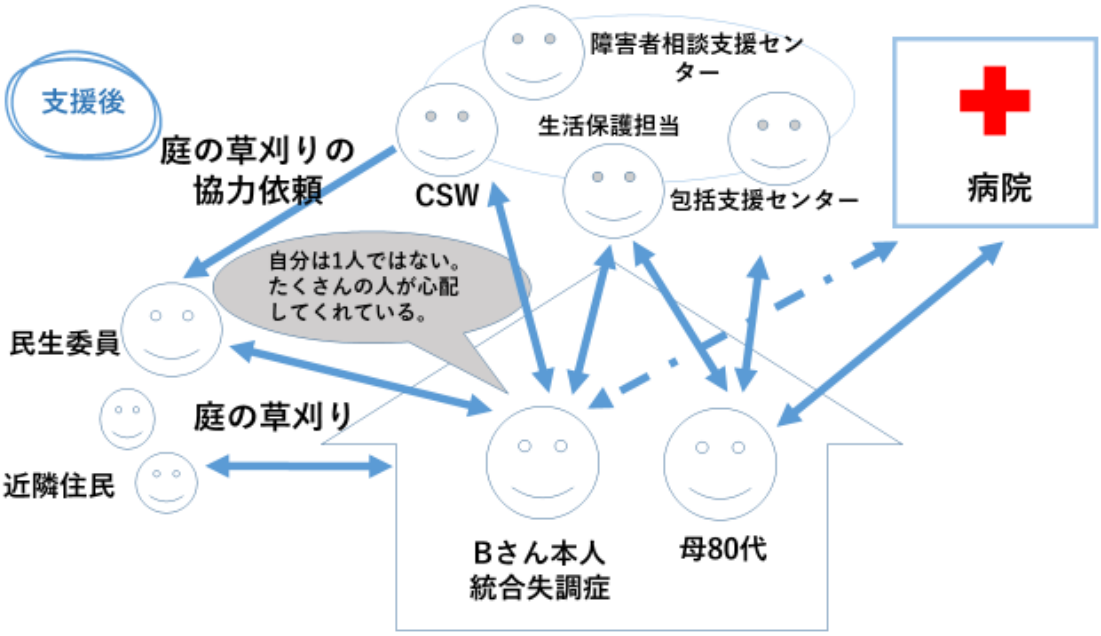
なかなか本人と会えずにいたが、訪問を重ねようやく本人と会うことができた。それから定期的に訪問して本人から「庭木が生い茂り困っている。一人ではどうすることも出来ない。」とはじめて困りごとを発信してくれた。本人の同意を得て地区の民生委員と話し合い、環境整備を手伝ってくださる地域の方と作業を行うことができた。

～専門職に向けての働きかけ～

今まで CSW が世帯に関わってきたが、本人には医療的ケアの実現に向けて障害者相談支援センターに協力を依頼し連携を図った。母には強い妄想があり詐欺に合うことも多く、本人との関係性も悪くなっていたため地域包括支援センターに協力を依頼し連携を図った。また、転居の希望があり生活保護にも協力依頼。

③CSW 介入の成果

今まで地域と関わりを持たなかったが、困ったときに手を差し伸べてくれる人と出会った事で本人の安心につながった。「自分は一人ではない。心配してくれる人がいて嬉しかった」と感情の変化がでてきて地域の方も「本人の力になれて良かった。」と感じてもらえ地域の協力体制を整えた。



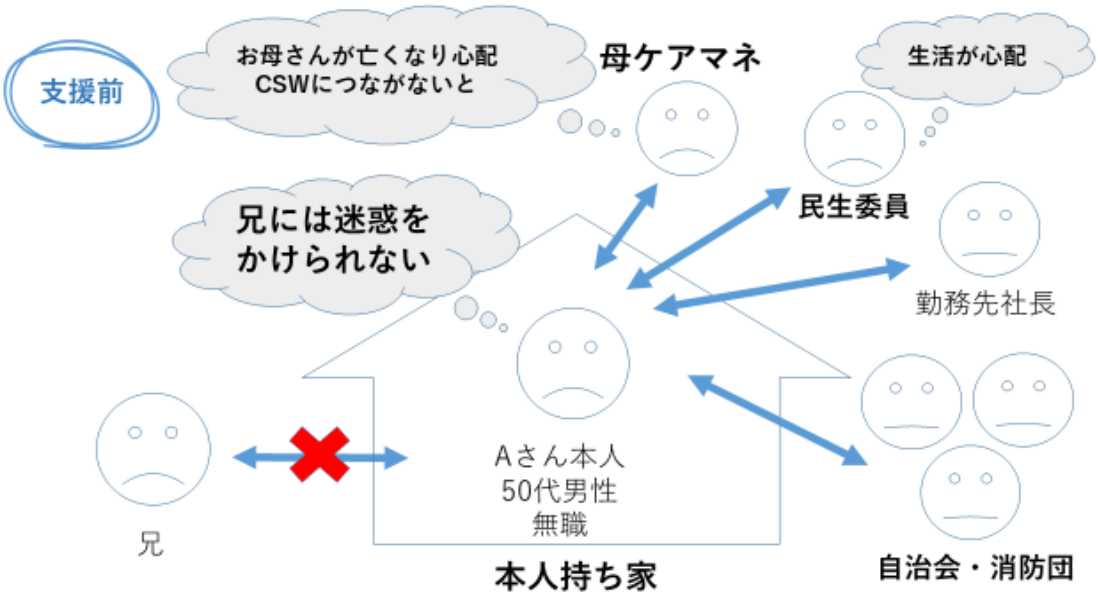
④課題

精神的な不安定さがあり生活リズムの崩れなど、まだまだ残された課題は多く解決には時間がかかるが、それぞれの機関が役割・連携をもち世帯、本人、母に関わり一歩ずつ進むことが必要である。

事例⑤　がんばって貢献してきた地域が助けてくれた

①事例概要（どんな方か・家族・生育暦・困りごとなど）

５０代後半の独居男性。母は数年前に他界。兄がいるが、兄家族の介護や仕事もあり本人とは疎遠だった。本人も兄には迷惑掛けたくないと思っている。地元の小・中学校を出て工業高校卒業。製造業の企業に就職し十数年働いてきた。30 代半ばのとき父が亡くなり、その後すぐ母がうつ病になり母の介護のため仕事をやめた。介護しながら消防団活動など地域の役もし、地域に対してもまじめに関わってきた。母の死後、地域の方の助けもあり少ししてから知り合いのところで仕事を始めた。しかしもともとお金の使い方がうまくないことで生活のしづらさがある。最近では電気も止まるなど生活がうまくいかないときもあった。



②CSW の働きかけ

～地域に向けての働きかけ～

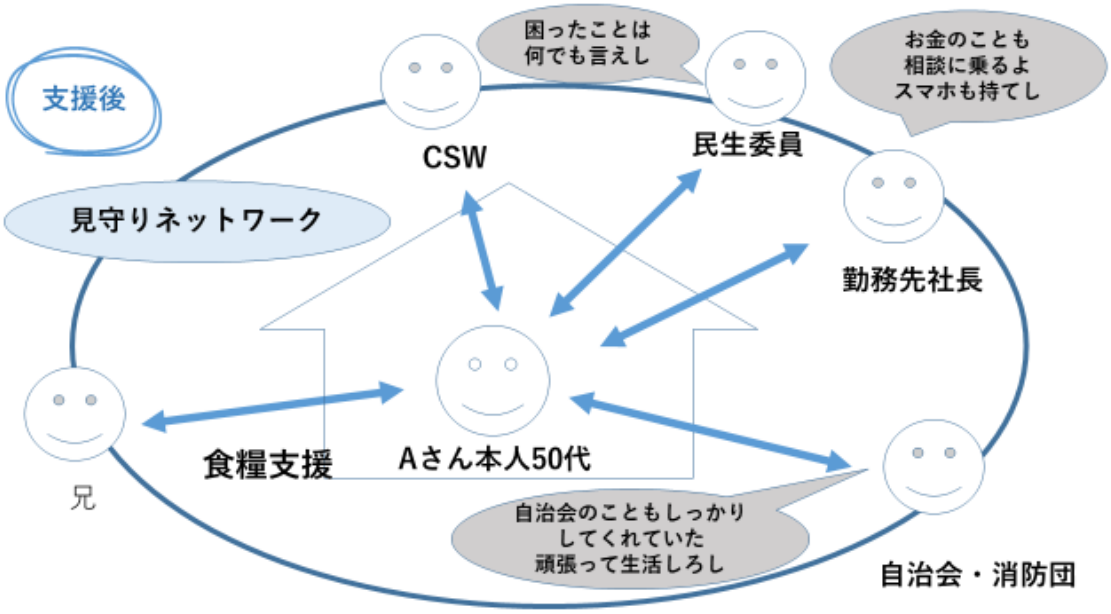
地域へのアクションとして、本人・民生委員・仕事先の方が知り合いだったこともあり、本人了承の基、生活状況やお金の使い方など課題を共有した。また、兄との情報共有も行い、兄と民生委員も元々知り合いなので、これを機に家族で出来ること・地域で出来ることを考えていただいた。

～専門職に向けての働きかけ～

このケースについては、何か制度利用すると言うわけではないが、相談をしてくれたのは本人の母のケアマネジャーであった。つなぎとして CSW に相談してくれたところから始まり、ケアマネジャーと情報共有し介入できた。

③CSW 介入の成果

兄は今まで疎遠であったがたまに様子を見に来たり食料をくれるなどしてくれるようになった。仕事先の上司は本人と話をし、お金を使いすぎないように分けて渡してくれたり、スマホを持たせてくれて何かあった際連絡が取れる体制にしてくれている。民生委員は継続して生活の中でのちょっとした相談を受けてくれている。CSW の視点として、本人の持っているつながりの強みを活かし、本人の出来ることが続けられて、苦手なところを支えてもらえるよう働きかけられた。そうすることで本人も体力仕事で活躍しながら生活できている。



④課題

この地域にも地域支えあい協議体があるが、現時点では一人ひとりの困りごとの話をすることが難しい。今後は本人の困りごとを一緒に考え、本人にもできることを投げかける必要がある。